

和歌山県

シニア災害ボランティア
シンポジウム開催報告

平成25年2月17日(日)、和歌山県和歌山市のホテルグランヴィア和歌山6階ホールにて、和歌山県並びに当協会が主催する「シニア災害ボランティアシンポジウム」が開催されました。

基調講演では、昨年12月まで和歌山大学地域連携・生涯学習センター長を務められ、現在は文部科学省初等中等教育局の企画官として活躍されている出口寿久氏に、和歌山大学時代にまとめられた紀伊半島大洪水での災害ボランティアセンター（以下、災害ボラセン）対応状況およびボランティアの役割を中心にお話いただきました。

パネルディスカッションでは、基調講演に引き続き、出口寿久氏にコーディネーターを務めていただき、パネリストとして東日本大震災や紀伊半島大洪水等において、実際に災害ボランティア活動に参加してこられた方々4名をお迎えし、実体験にもとづく現場の生の声をお話いただきました。

13:30 ~ 14:30

基調講演

シニア世代と災害ボランティア活動

最初に、平成23年の台風12号による紀伊半島大洪水における被災6市町の災害ボラ

セン対応状況をお話しします。近い将来、必ず来ると言われている南海・東南海地震に備えるにあたって、この調査結果が役にたてればと思います。

1. 平時からの連携が大切

有事に備えるためには、地域住民、社会福祉協議会（以下 社協）、行政が平時から連携していくことが非常に大切です。平時から連携ができていた市町では、今回の大洪水にあっても、効率的な災害復旧活動が出来ていました。

2. 災害ボラセン開設の予行演習

地域住民・社協が合同で年1回は防災訓練を実施し、その訓練のなかで避難経路の確認などとともに、災害ボラセン開設の予行演習しておくことも有効です。

3. 民間支援団体との調整

民間支援団体は経験とノウハウを持っているので、ありがたいのですが、一地域を担当させて、任せっきりにするのは、民間支援団体が引き揚げた後で問題が起ることがあります。あくまで地域の社協が中心になって災害ボラセンを立ち上げ、その指揮下で民間支援団体に活動してもらうのが望ましいと思います。

つぎに災害ボランティアの役割についてお話しします。

1. あくまで被災者のために

被災地の役に立ちたいという明確な意思を持つことが必要です。ボランティアのなかには、自己実現のために活動をする人もいますが、あくまでボランティアは被災者のためにやっていく活動なので、自分を中心に考えてはいけません。

2. ボランティアは自己完結型

ボランティアは自己完結型。被災地に負担をかけないように、宿泊場所・水・食料・その他身の回りのものは自分で用意して行くのが基本です。また、安全や健康についても、自分自身で管理することが大前提です。

3. 多種多様なボランティア

災害ボランティアは「泥かき」のような重労働が中心に思われがちですが、被災者の話し相手になって、寄り添ってあげること、すなわち「心のケア」も重要な活動です。その他、救援物資の仕分け作業、泥まみれになった写真の復元作業、炊き出しなど体力に自信がなくても、シニアでも取り組めるボランティア活動がたくさんあります。皆さんもぜひ積極的にボランティア登録をしていただきたいと思います。

最後に平時の取り組みとして、学校支援ボランティアについてお話ししたいと思います。

1. 平時の活動できっかけづくり

日頃から何か活動をしている方のほうが、



災害が起きたら災害ボランティアに行こうということになるので、行政側も平時から活動の機会をつくる必要があるだろうと考えます。ボランティアのきつかけづくりとして、最適な活動のひとつが学校支援ボランティアです。

2. 学校支援ボランティア

ドリルの採点の手伝い、図書館の本の整理、校庭の草刈り、花壇の整備、通学路の安全確保、部活動の指導など、学校教育に関連したボランティア活動はたくさんあります。

東日本大震災のとき、住民が学校を支援する取り組みをしていた地域では、日頃からつながりができていたので、避難所の運営が非常に順調だったそうです。

和歌山県では「きのくに共育コミュニティ」として、地域と学校が共に育っていきましようという活動に平成20年から取り組んでいます。皆さんもぜひご参加ください。

14:40~16:00

パネルディスカッション

災害ボランティア活動って難しい？

各パネリストよりテーマに関する発表がありました。その主な発言内容は以下のとおりです

●梅木直幸氏

(日本防災士会 理事)

災害ボランティアというと「泥かき」のような体力のいる仕事を連想しがちですが、ボランティアには、いろいろな仕事があります

す。「出来ないことをやれ」とは言いません。

また、健康上の理由等で現地に向くことが出来ない人も、現地に行ってくれる人を義援金など経済面で支える、「支える人を支える」ボランティアに参加出来ると思います。

自分の「思い」を「心」を行動に移すことが、非常に大切だと思います。

●泉康夫氏

(災害ボランティア経験者)

私はボランティアに参加する仲間を増やしていくために、普段から友達などに気軽に声をかけています。

「ボランティアでこんなことをしたよ。被災地でこんなことがあったよ」などの話をすると、「ボランティアに参加したことがないから、今度連れてって」となります。

震災3か月後に被災地に入った時、水と食料をわざわざ持っていたのですが、コンビニがすでに開いており、現地に生活資材はほとんど揃っていました。現地の最新情報を事前につかんでおくことが大切だと思います。

●山下真理氏

(災害ボランティア経験者)

私は4人の子供の母親であり、両親も同居しているため8人の大家族です。

91歳の父と86歳の母の介護をしながら、両親がデイサービスに行っているあいだにボランティアに参加しています。子供たちも私の活動を理解してくれており、私のいない時には両親の面倒を見てくれています。

ボランティア活動のなかで、「女性の視点」というのも大切だと思います。目が届くところや気づくところが男性とは異なると思います。また、被災者の話し相手になって、被災者に寄り添う「心のケア」も大切な活動だと思います。

●岡本晃記氏

(和歌山県社会福祉協議会 長寿社会推進部長)

岩手県大槌町にボランティアに行った時のことですが、片道1000キロ、17時間かけて被災地に向いて、与えられた仕事は、河川敷の清掃や花植えなど環境保全の仕事でした。「泥かき」などを予想していたため、「はるばる来てこれか……」とその時は正直思いました。しかし、これは間違いであることに気づきました。あくまで、ボランティア活動とは被災者・被災地目線で考えることが基本です。地元のニーズが大前提です。再生プロジェクト、復興につなげる活動も立派なボランティア活動なのです。

最後にまとめとして、コーディネーターの出口氏より以下の話がありました。

- ・シニアの方にはボランティアの人手が足りなくなる平日に参加していただきたい。
- ・平時から防災訓練等を通じて地域の皆さんでつながりを持っていたことが大切です。
- ・有事の際は行政頼みというのも難しいです。まずは自分の命は自分で守る「自助」。
- ・つぎが隣近所で助け合う「互助」「共助」。
- ・そして、他の地域で災害が起こったときの「ボランティア」へとつながります。